

大阪経済大学特別招聘教授
経済評論家

岡田 晃

歴史に学ぶ

第三十四回 女性実業家の先駆者、広岡浅子／『九転十起』の人生

三井家に生まれたお嬢様、 大阪の豪商・加島屋に嫁ぐ

明治時代に活躍した女性実業家、広岡浅子のことをご存じだろうか。十年近く前のNHK連続テレビ小説「あさが来た」で主人公のモデルとなつた女性と言えば、思い出される方も多いだろう。

浅子は一八四九年、豪商・三井家の本家の一つである出水三井家六代目当主・高益の四女として京都で生まれた。

そんな商家のお嬢様にふきわしく、琴や三味線、習字、裁縫などの稽古の毎日だった。ところが本人はそれが嫌いで、丁稚と相撲を取つたり木登りしたりして遊んでばかり。男兄弟がやつていても、両親から学問を禁止されたという。

一八六五年、浅子は十七歳になり、大阪の豪商・加島屋当主の広岡家の次男・信五郎に嫁い

だ。加島屋は鴻池と並んで大阪を代表する豪商で、信五郎はその分家の当主だった。

その頃は幕末の動乱期、世情は騒然としている。浅子は結婚してすぐに「こんな時代に何が起きるか分からぬ。大店でも油断できない」と危機感を抱くようになる。そこで、実家で禁止されていた学問を再開、そろばんや簿記を独学で学び、さらには店の帳簿にも目を通じて商売の勉強も重ねた。夫の信五郎もそんな浅子の行動を受け入れ、経営について意見を聞いたりもしていた。

幕末の動乱・明治維新で経営危機に 炭鉱開発に単身乗り込む

在の大同生命に残っているという。

浅子が二十歳になつた一八六八年（明治元年）に、今度は明治新政府が加島屋をはじめとする大阪商人に合計三百万両の御用金の献金を命じた。そんな中、経営を切り盛りしていた当主の正饒が亡くなつてしまふ。

さらに廃藩置県（一八七一年・明治四年）によって、加島屋はついに経営危機に陥つてしまつた。加島屋は江戸時代から長州藩をはじめ全国約三百の藩のうち三分の一の藩に融資しており、貸付総額は九百万両（一両＝五万円として、現在の四千五百億円）と言われるが、そのほとんどが回収不能となつてしまつたのである。

「今こそ自分の出番だ」と、浅子は積極的に経営に参画するようになる。加島屋の経営は、本家の当主となつた正秋（信五郎の弟）、分家の信五郎、そしてその妻である浅子の、若い三人が中心となり再建に動き出した。

浅子がまず取り組んだのは、膨大な借金の整

理。返済猶予の交渉、融資の回収、それに加えて江戸時代から付き合いの深い旧大名家から要請のあつた融資の断りのため、大阪と東京を行き来し、東京の旧大名屋敷を駆け回った。

だが、それだけで経営を立て直すには不十分で、新しい時代に対応した事業の確立が不可欠だ。そこで浅子が目をつけたのが石炭だった。工業化に伴い石炭の需要が増大すると読んだのだ。浅子は一八八四（明治一七）年、筑豊の有力な炭鉱主・帆足義方と提携し、広炭商店という会社を設立した。帆足の炭鉱で採掘された石炭を同社が独占的に販売するというので、浅子は実家の三井家が設立した三井物産を通じて、上海など海外に輸出することを考えていた。石炭の積出港と



して、当時は塩田しかなかった門司を開発し、税関も設置された。その後の門司の発展は、浅子がいかに先見性とビジネス感覚にすぐれていたかを示している。

ただ、着眼点はよかつたが、逆風の連続だった。帆足の炭鉱での出炭が上がりらず、広炭商店は経営不振に。そのため、三井の番頭格である三野村利助らを迎えて新会社「日本石炭会社」に改組したが、これも松方デフレの影響で石炭価格が暴落し、わずか一年で会社は解散に追い込まれる。

それでも浅子はあきらめなかつた。現在の福岡県飯塚市にあつた潤野炭鉱だけが手元に残ったが、浅子はその開発を続けたのだ。しかし、大断層にぶつかって採掘を断念せざるを得なくなるなど、何年経つても成果が上がらない。「隣の鉱区が盛んになっているのに、わが鉱区だけ奏功しない道理がない」と言つて、ついには炭鉱に泊まり込み、自ら坑内に入つて鉱夫を指導監督するという伝説的行動を起こすに至つた。その時、護身用のピストルを懐に忍ばせていたという。

その甲斐あつて、ようやく一八九七年から産出量が急増し始め、潤野炭鉱は優良炭鉱へと成長したのだつた。

銀行、生保にも進出 すぐれたビジネスセンスと先見性

一方、石炭事業と並行して加島屋は加島銀行を設立（一八八八年）、真宗生命を買収（一八九九年）するなど、事業の転換と拡大を進めていった。真宗生命はその三年後に、他の生命保険会社

二社と合併して大同生命となり、今日に至つている。生保事業への進出も浅子の決断によるものだつた。女子教育にも力を入れ、現在の日本女子大学の設立に尽力した。

このように浅子は苦難の連続だつたが、それを乗り越えて加島屋の事業を発展させてきた。五代友厚や渋沢栄一などの支援も受けている。特に大阪財界のリーダーだった五代は大阪株式取引所（現在の大坂取引所）を設立し、その役員に信五郎が就任している。こうした関係を通じて、浅子との接点もあつたと思われる。

晩年にクリスチヤンとなつた浅子は、キリスト教系の新聞で「九転十起生」というペンネームで連載を執筆した。まさに浅子の人生を言い表しているが、危機に立ち向かう強い意志、すぐれたビジネスセンスと先見性、そして周りの人たちとの協力が「九転十起」の原動力となつた。女性活躍の必要性が叫ばれる今、その先駆者である浅子の足跡を知ることは意義が深い。

と同時に、浅子が活躍できたのは夫・信五郎の理解と協力があつたからこそだつた。今日の企業経営においても、女性が活躍できる環境づくりが重要であり、それが企業の発展にもつながることを強調したい。

岡田 晃（おかだ あきら）

一九七一年、慶應義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。
編集委員を経て、テレビ東京出向。「ワールドビジネスサテライト（WBS）」マーケットキャスター、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長。二〇〇六年から大阪経済大学客員教授。二〇一二年、同特別招請教授。
新刊『徳川幕府の経済政策——その光と影』（PHP新書）。